小学館の創作童話シリーズ

おひめさまとりゅう

ネスビット
山主敏子・訳
駒宮録郎・画



小学館

訳者よりママへ――

憎まれ、恐れられていた独りぼっちの龍は、たまらなく寂しかったのです。友達がほしかったのです。
そして、生まれて初めて出会ったお姫様のやさしさは、孤独に凍りついた龍の心を暖かく融かして、まったく違った龍にしてしまいました。
この物語が、子供たちに愛とやさしさの力を知らせてくれますように。

山主敏子

小学館の創作童話シリーズ

おひめさまとりゅう

ネ　ス　ビ　ッ　ト
山　主　敏　子・訳
駒　宮　録　郎・画



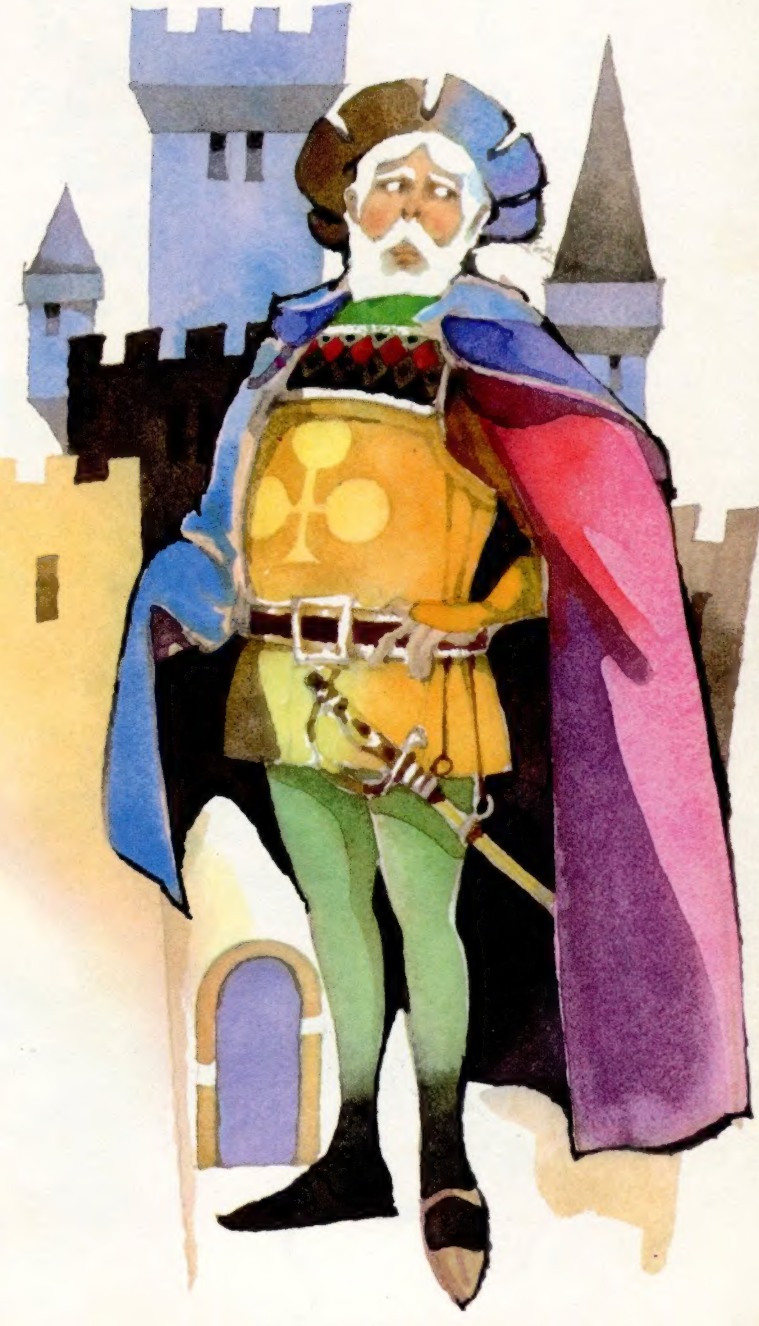
小　学　館

むかし、りゅうは　どこの　国にも　いて、
おひめさまを　たべて　しまう、こわい　どうぶつでした。
でも、ゆうかんな　王子さまたちは、みんな、
おひめさまを　まもって、りゅうを　たいじ　しました。
そして、りゅうは、とうとう、イギリスに　一ぴきだけ
のこりました。
それは、からだじゅう、てつの　うろこが　はえた、
大きな　大きな　りゅうでした。





さて、イギリスの　王さまには、ひとりの　かわいい
おひめさまが　いました。
りゅうが、いつ、おひめさまを　たべに　くるかと
おもうと、王さまは　きが　きで　ありません。



けれど、 かわいいだけで なく、 げんきで、 けんも
とくいな おひめさまは、 いいました。
「わたし、 だれにも たすけて もらわないで、
ひとりで、 りゅうを たいじ するわ。」





「とんでも　ない！　女の子が　そんな　ことを
かんがえる　ものでは　ない。」
と、王さまは　いいました。
「いつだって、りゅうは　王子が　たいじ　して
きたのだからね。」
そして、ひとりの　王子を、おしろに　よんで
いいました。
「おまえが、みごとに　りゅうを　たいじ　したら、
ひめを　およめに　あげよう。」



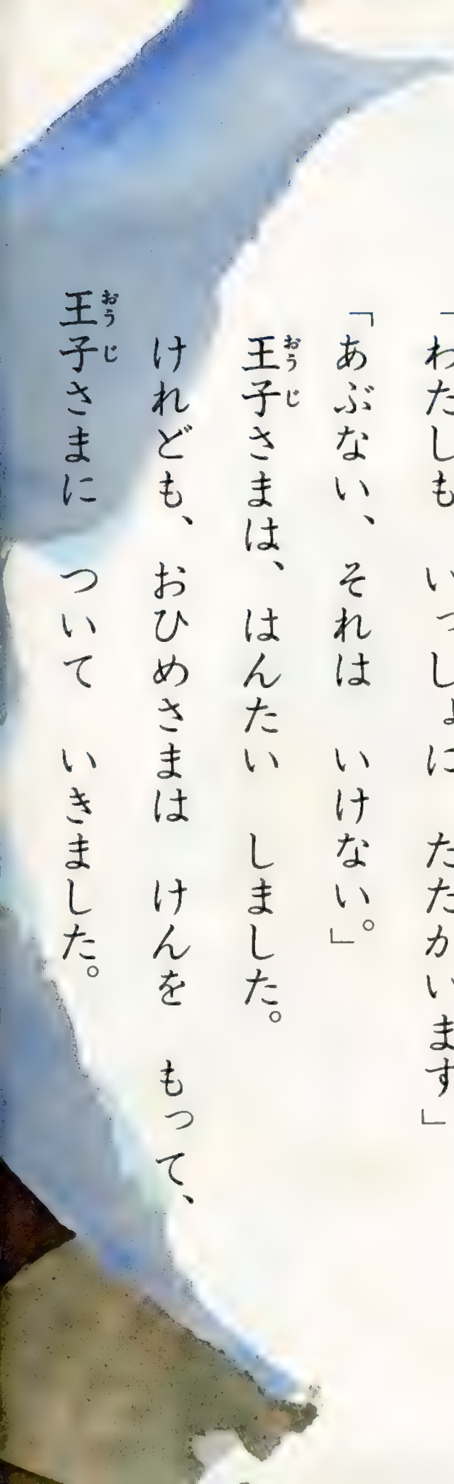


この　王子さまは、はつめいが　すき。
あたまの　中は、あたらしい　きかいや　かがくの
ことで　いっぱい。
あまり　力は　つよそうで　ありません。
「あなたは、ほんとうに、りゅうを　たいじ　できると
おもいますか？」
おひめさまは　たずねました。
「あなたの　ためなら、いのちを　すてて　たたかいます。」
王子さまは　きっぱり、こたえました。



「なぜ、あなたは、　わたしの　ために　いのちを
すてるのですか？」
「あなたが　すきだからです。」
王子さまは　いいました。
（なんて　やさしい　かた！）
と、おひめさまは　おもいました。
　そして、あまり　つよそうでは　ない　王子さまが、
もしも　りゅうに　ころされたら……と　おもうと、
とても　しんぱいでした。

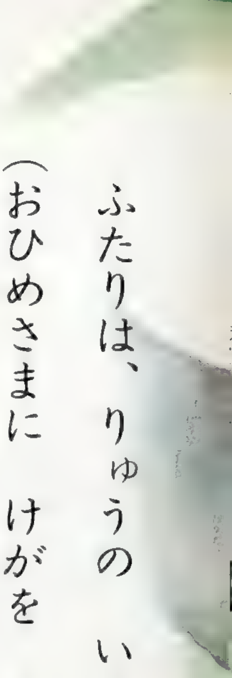




りゅうは、山の　いわの　ほらあなに
すんで　います。
いよいよ、王子さまが　りゅうを　たいじに
いく　日が　きました。
おひめさまは　しんぱいで、じっと　して
いられません。
「わたしも、いっしょに　たたかいます。」
「あぶない、それは　いけない。」
王子さまは、はんたい　しました。
けれども、おひめさまは　けんを　もって、
王子さまに　ついて　いきました。

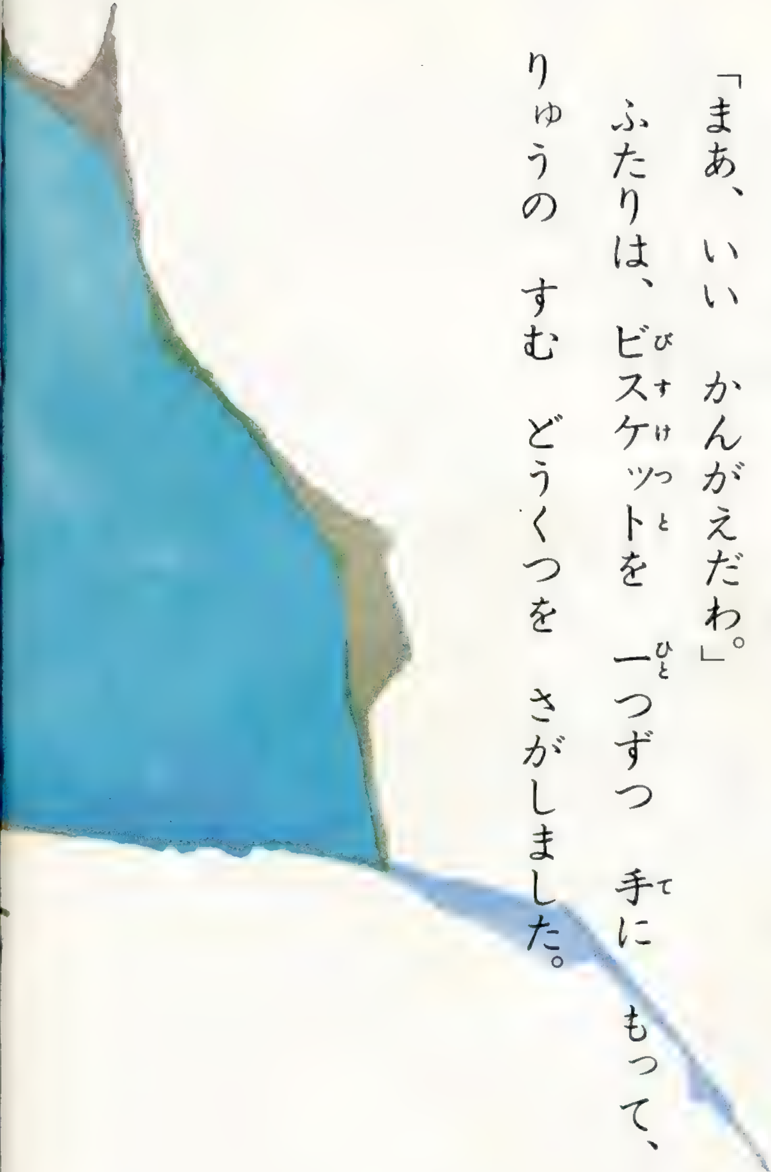






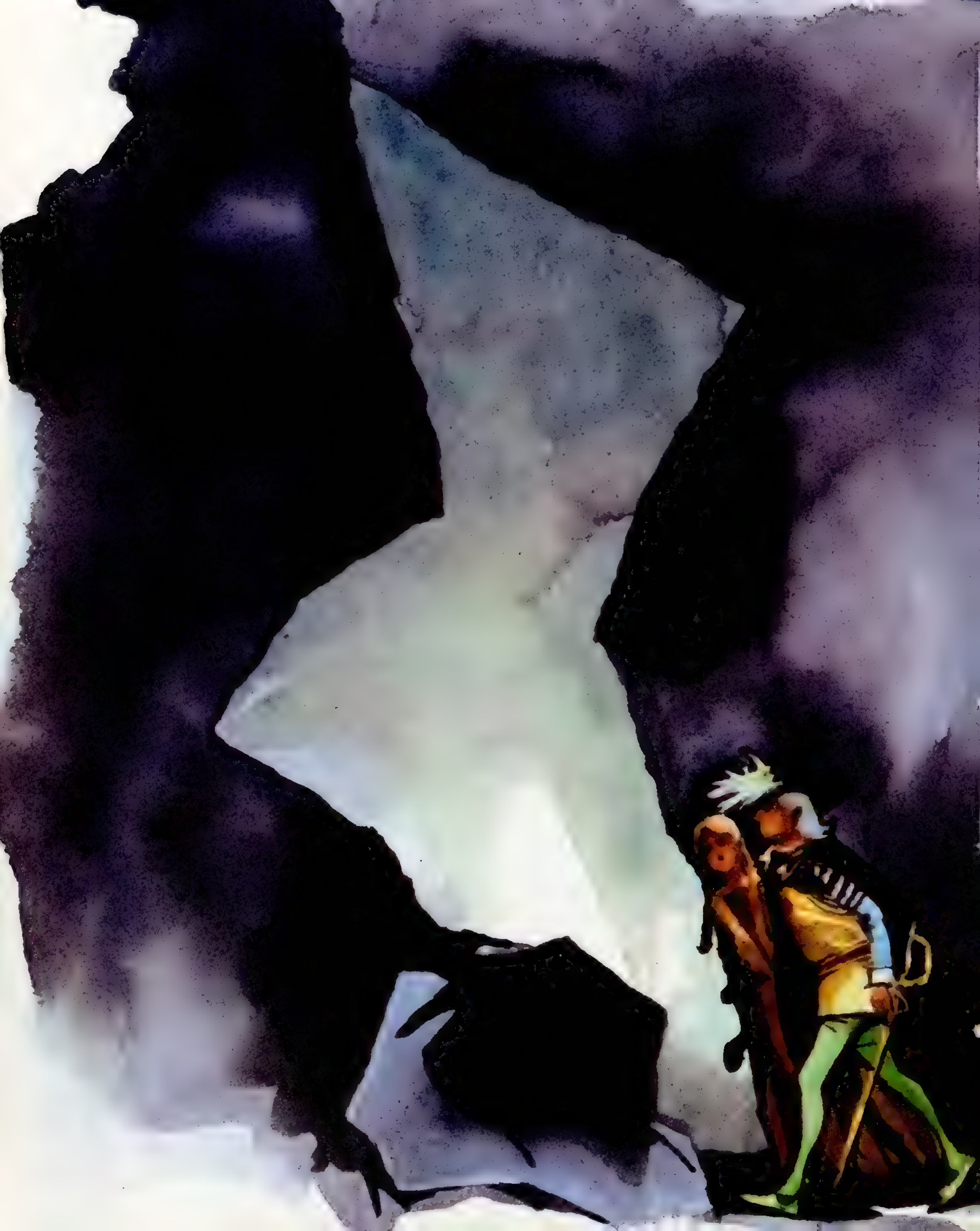
ふたりは、りゅうの　いる　山に　つきました。
（おひめさまに　けがを　させたく　ない。）
それだけでは　なく、王子さまは、
「りゅうを　ころすのも　かわいそうだ。」
と、だんだん　かんがえが　かわって　きました。
「せかいで　たった　一ぴきの　りゅうだもの。
いけどりに　する　ほうほうは　ないだろうか。」
「ほんとうに。」
おひめさまも　うなずきました。
「それには、やさしく　して　あげるのが、いちばん
よいのでは　ないかしら。」

「やさしく　して　やるには、なにか　たべる　ものを
あげるのが　いい。これは　どうだろう？」
王子さまは、ポケットから　ビスケットを　だしました。
「まあ、いい　かんがえだわ。」
ふたりは、ビスケットを　一つずつ　手に　もって、
りゅうの　すむ　どうくつを　さがしました。





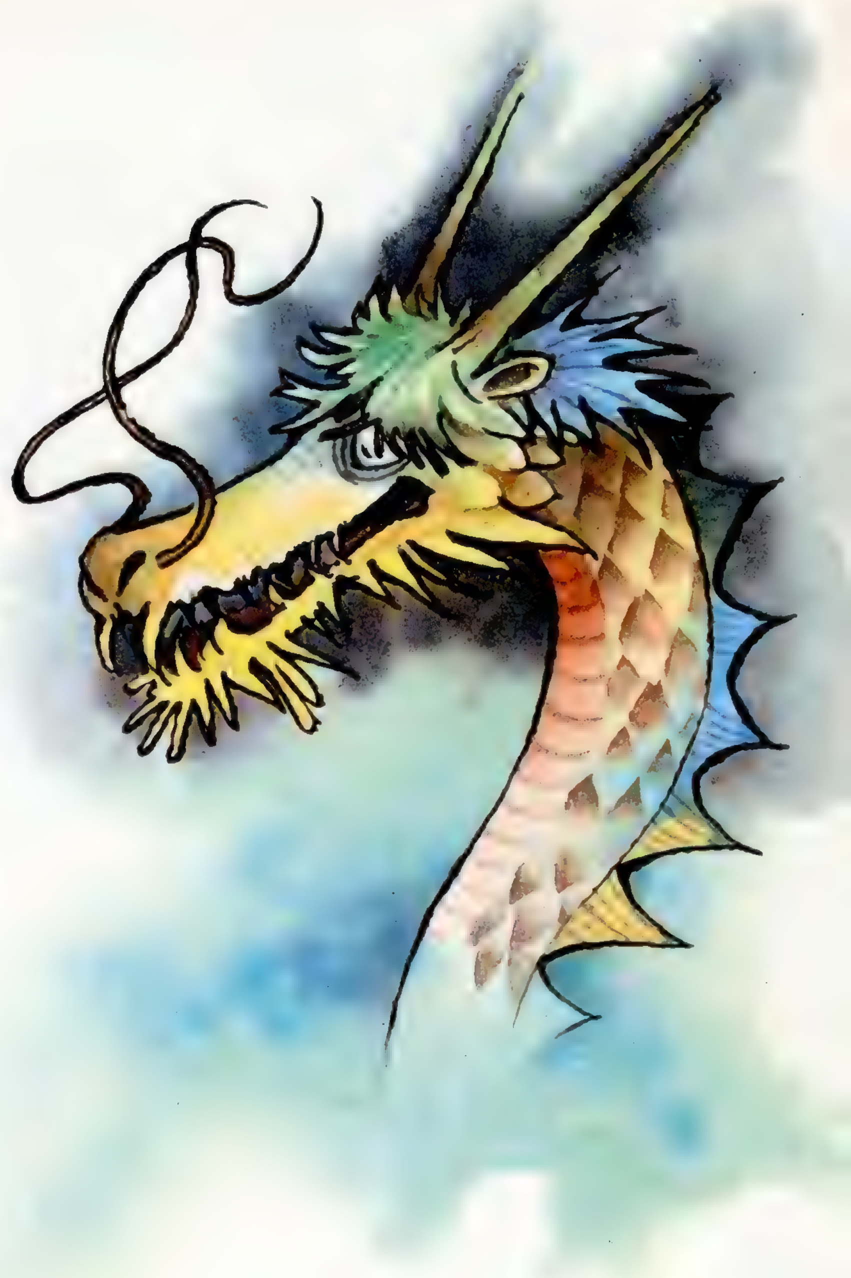
「あ、ここだ。」
とうとう、みつけました。
王子さまの　ゆびさした　いわには、りゅうが、
つめで　ひっかいたらしい　あとが　ありました。
入口には、くるまの　わの　あとのような
ものが、つづいて　います。
「これは、りゅうが　しっぽを　ひきずった
あとに　ちがいない。」
「こわい。」
げんきな　おひめさまも、いざと　なると、
すこし　ふるえて　います。





王子さまは、おひめさまの　手を　しっかりと
にぎり、どうくつの　入口に　たって　さけびました。
「おうい、りゅう。中に　いる　りゅう　やあい！」
すると、どうくつの　おくで、がたがた、ぎいぎい、
てつの　うろこが　あたりに　ぶつかる　おとが　しました。
「でて　いらっしゃい、りゅう。」
おひめさまも　さけびました。
「わたしたち、あなたに　プレゼントを　もって
きたのよ。」





「おれは、その プレゼントが なんだか しって いるぞう。」
りゅうは、大きな かみなりのような こえで、
こたえました。

「おひめさまを　ひとり、くれるって　いうんだろう。
だが、そんな　ものを　もらって、おれが　どう　する。」
「たべるんじゃ　ないの？」
「くだらん　ことを　いうな。むかしの　りゅうは、
おひめさまを　くおうと　して、みんな　たいじ　された。
だが、おれは　むかしの　りゅうとは　ちがうんだ。」



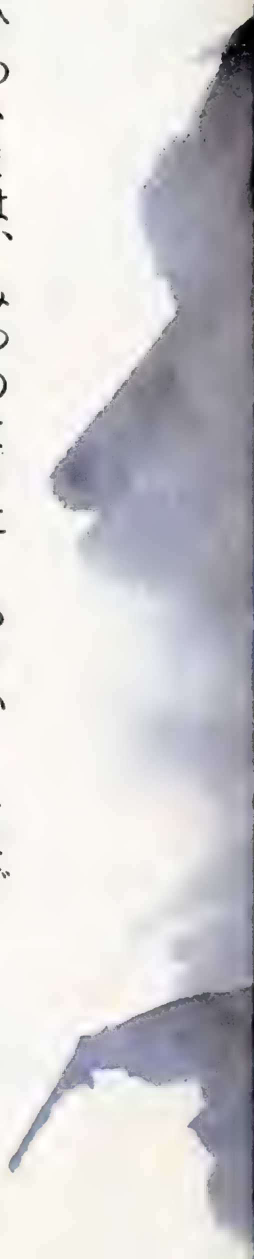
おひめさまは　ほっと　して、
「それでは、ビスケットは　いかが？」
「いらないね。」
「おさとうが　ついた　おいしいのでも？」
「いらないね。」
「じゃあ、いったい　なにが　すきなんだ？」
こんどは、王子さまが　たずねましたが、
「あんたたち、かえって　くれないか。おれの
ひるねの　じゃま　しないで　くれ。」
そして、また　がたがた、ぎい、ぎいっ、
りゅうの　ねころぶ　おとが　しました。





「どう　しよう。」
王子さまは　かんがえました。このまま　おしろへ
かえって、
「いまの　りゅうは、おひめさまを　たべようなんて
しません。」
そう　いっても、王さまが　しんじて　くれるでしょうか。
それに、このままでは、りゅうを　いけどりに　する
ことも　できません。
「でも、りゅうにだって、きっと　すきな　ものが
ある　はずよ。もう　一ど　きいて　みましょう。」





おひめさまは、みつのように　あまい　こえで
いいました。
「りゅうさん、りゅうさん、かわいい　りゅうさん！」
すると、びっくり　したような　こえが　かえって
きました。
「なんだって？　もう　一ど、いって　くれ！」
「りゅうさん、りゅうさん、かわいい　りゅうさん！」
とたんに、りゅうは　こう　いいました。
「ま、まって　くれ。おれ、そっちへ　行く。」



がた、がた、がちゃん、ぎいっ。
てつの うろこが いわに ぶつかる おとが して、
りゅうは、とうとう、どうくつの 外へ あらわれました。
大きな つばさを はんぶん ひろげ、お日さまの
光を うけた ぎんいろの うろこは、きら きら きら。
ダイヤモンドの ように ひかって います。
ながい からだを くねくね、きらきら させて、
りゅうは、王子さまと おひめさまに ちかよりました。

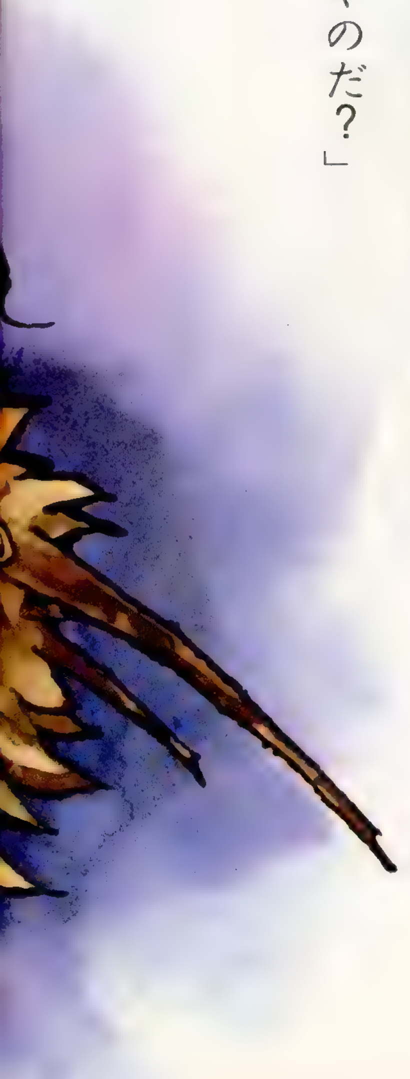


（やっぱり、おひめさまを　たべる　つもりだろうか？）
王子さまは、おもわず、こしの　けんに　手を
かけました。

けれども、りゅうは、ふたりの　まえまで　くると、
小犬が　あまえる　ときのように、ころりと　あおむけに
なって、ぽろぽろ　大つぶの　なみだを　こぼしました。

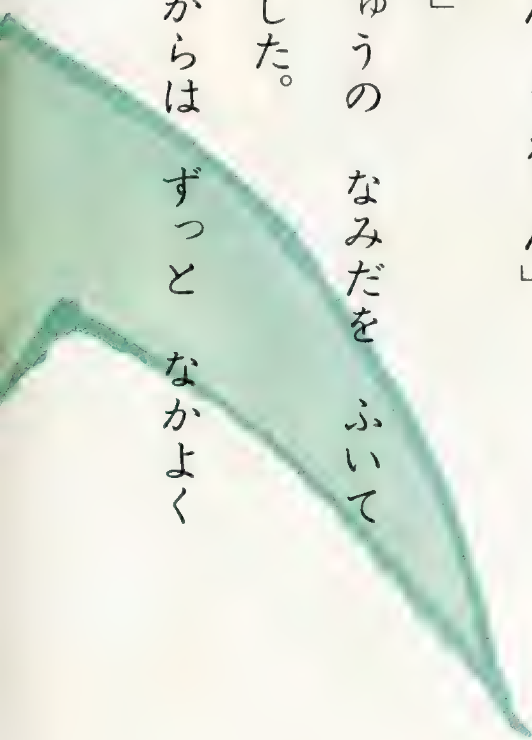
「まあ、りゅうさん　どう　したの？」

「なぜ、なくのだ？」





りゅうは、なきながら　こたえました。
「おれは　これまで、だれにも　やさしい　ことばを
かけて　もらった　ことが　ない。でも、きょう、
はじめて、かわいい　りゅうさんと　いわれた。
かわいい　かわいいだって。お、おれ、それが
うれしくって、おーん、うえーん。」
「もう　なかないで。」
おひめさまは、りゅうの　なみだを　ふいて
あげながら　いいました。
「わたしたち、これからは　ずっと　なかよく
しましょう。」







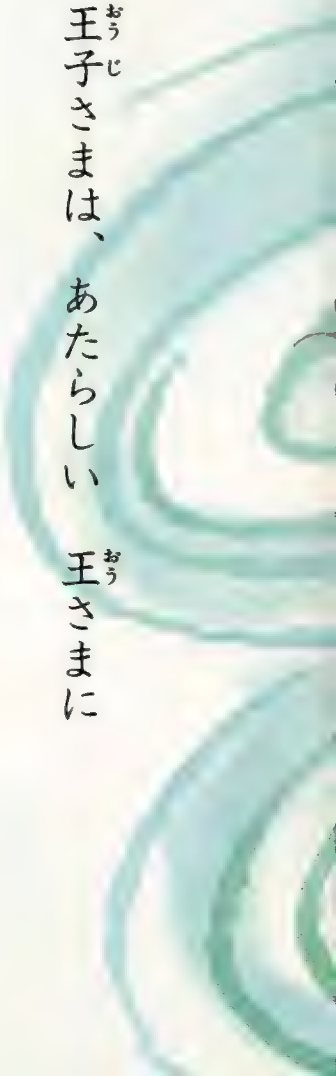
「なかよく　しますとも。
おれは、ほんとうは
おとなしい。それを、
わかって　くれた
あんたたち。あくしゅ
して　ください。」
りゅうは、てつの
つめが　ある、大きな
まえあしを　だしました。
それは、すこしも
いたく　なく、



王子さまと
おひめさまの　手を
やさしく　つつみました。
こうして、王子さまと
おひめさまは、りゅうを
つれて　おしろに
かえり、めでたく
けっこん　しました。



まもなく　王子さまは、　あたらしい　王さまに
なりました。
りゅうは、　王さまに　たのみました。
「わたしも、　お国の　やくに　たちたいと　おもいます。
この　大きな　からだや　つばさを　つかって、
わたしに　できる　しごとは、　なにが　あるでしょう。」
はつめいの　すきな　王さまは、　よろこんで、
りゅうの　せなかに、　くらを　つける　ことを
かんがえました。

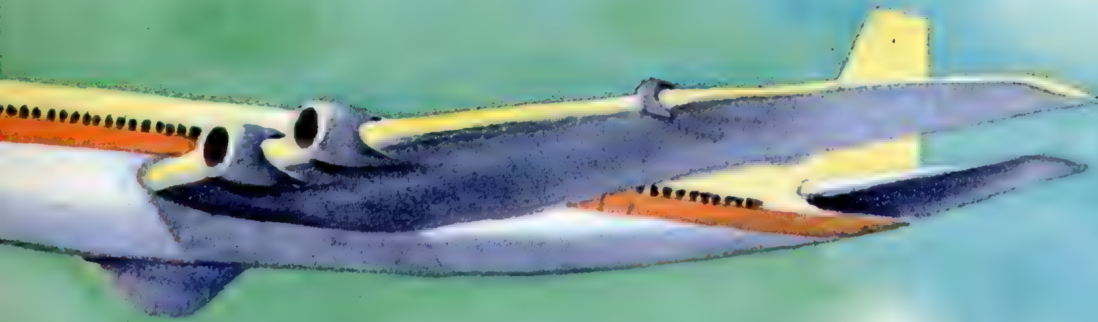




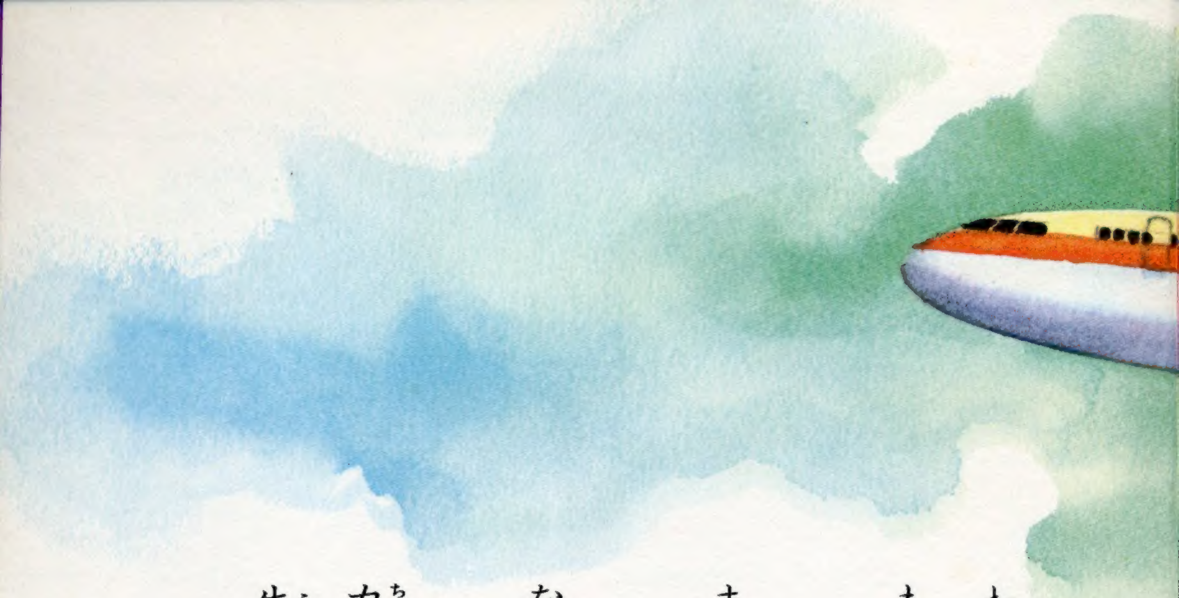
りゅうの　せなかの
くらには、百五十の　いすが
ついて　いました。
その　いすに、百五十人の
子どもを　のせて、まい日、
かいがんへ　とんで
いくのが、りゅうの
たのしい　しごとでした。



子どもたちが　あそんで
いる　あいだ、りゅうは、
すなはまで　じっと
まちます。
子どもたちは　りゅうが
大すき。
「かわいい　りゅうさん！」
いつも　そう　よびました。
その　たび、りゅうの
目には　うれしなみだが
うかぶのでした。



こうして、なん年か　たちました。
りゅうも、ずいぶん　年を　とり、
みんなは、こんな　うわさを
するように　なりました。
「いまは、あたらしい　きかいが
どんどん　できて　いる。もう、
りゅうが　空を　とぶなんて、
りゅうこうおくれだ。」
これを　きいた　りゅうは、
かなしく　なって、王さまに
たのみました。



「おねがいです、王さま。どうか、
わたしを　りゅうこうおくれで　ない
ものに　かえて　ください。」
　もちろん、王さまは　よろこんで、
また　ちえを　しぼりました。
　さて、りゅうは　なにに
なったでしょう。
　さいごの　りゅうは、王さまの
力で、とうとう　ひこうきに
生まれかわったと　いう　ことです。

おしまい



山 主 敏 子

（やまぬしとしこ）

東京は神田の生まれで、日本橋育ち。
青山女学院英文科から共同通信文化部へ。論説委員を最後に文筆生活に入る。
『いさましい船長さん』『アラビアンナイト』『帰ってきたむく犬』など飜訳多く、現在、児童文芸家協会理事長の重責を果たしながら執筆にも旺盛に取りくんでおられる。

すまい　東京都杉並区
阿佐谷北２～17～５



駒 宮 録 郎

（こまみやろくろう）

大晦日の明るい朝日を受けて午前８時15分出生。その時、手に絵筆を握っていたとか(!?)いう話。が、画家ひとすじの道を決定したのは、浦和中学時代の恩師、美校(現芸大)出の福宿一穂先生の指導。10年間の軍隊生活に拘らず、独自の境地を開拓。かくて『オーファンとテオ』『日本神話集』(全５巻) が出来上がった。

すまい　東京都国立市
東３～７～17
かどやビル502

装丁　長 野 博 一

小学館の創作童話シリーズ㉛ “おひめさまとりゅう” 山主敏子・訳　駒宮録郎・画　©1976小学館

昭和51年８月16日初版第１刷発行　昭和55年８月30日初版第６刷発行

編集兼発行者　相 賀 徹 夫　発行所　株式会社　小 学 館　東京都千代田区一ツ橋2－3－1　〒101

印刷所　図書印刷株式会社　東京都港区三田５－12－１

☎東京03－230－5540(代) 編集
☎東京03－230－5333(代) 製作
☎東京03－230－5739(代) 販売
振替　東京8－200

❀小学館の創作童話シリーズ❀

——幼稚園～低学年むきの新しい創作読物——



1	ぼくはしょうがくせい	石坂洋次郎 山中冬児・画	26	しろいあしあと	安房直子 牧村慶子・画
2	おこりんぼむし	土家由岐雄 横山隆一・画	27	おさるでんしゃ	上崎美恵子 熊川正雄・画
3	くまたろう	久米元一 熊川正雄・画	28	めぐちゃんの赤いかさ	落合恵子 すずき大和・画
4	アーコのおみまい	大石真 安野光雅・画	29	ぼくのくろう	畑正憲 岩本康之亮・画
5	おやまのこぐま	浜田廣介 西村達馬・画	30	いたずらタンタのアルバイト	神沢利子 村上勉・画
6	しろいしろいえりまきのはなし	安房直子 渕上昭広・画	31	おひめさまとりゅう	ネスビット 山主敏子・訳 駒宮録郎・画
7	ぞうのはなこさん	山中恒 沢井一三郎・画	32	ことりになったライオン	山崎陽子 山田哲也・画
8	はんぶんちょうだい	山下明生 松永謙一・画	33	おばけのたらんたんたん	香山彬子 佃公彦・画
9	おいしいおにぎりをたべるには	今西祐行 斉藤博之・画	34	あかい目—ぼくのイエスさま	藤原一生 かみやしん・画
10	かがみのなかのぼうや	ネスビット 白木茂・訳 中谷千代子・画	35	ぞうの星みつけた	佐野美津男 高橋宏幸・画
11	どろどろどろえもん	寺村輝夫 梅田俊作・画	36	ひかるゴンドラ	岡野薫子 赤坂三好・画
12	はらぺこのとこやさん	小沢正 北田卓史・画	37	パイロット三ちゃん	崎川範行 横山隆一・画
13	からすのくろすけ	小林清之介 水野二郎・画	38	むすめよ…—どくとるマンボウのおくりもの	北杜夫 鈴木博・画
14	おきんとおたぬきさま	筒井敬介 若菜珪・画	39	ジャングルめがね	筒井康隆 長尾みのる・画
15	五つめのおくりもの	川北りょうじ 杉浦範茂・画	40	わたしのこねこ	田中澄江 長野博一・画
16	女王さまになるために	マリ・コルモン 榊原晃三・訳 長野博一・画	41	みんなおいでよ	あまんきみこ にしまきかやこ・画
17	そのごのうさぎとかめ	谷真介 赤坂三好・画	42	チンパンジーのキキ	神戸俊平 エムナマエ・画
18	ライオンららら	立原えりか やなせたかし・画	43	ふしぎなひきだし	田辺聖子 岡田嘉夫・画
19	おばあさんせいと	宮崎博史 菊池貞雄・画	44	ねこときつねがさんぽして	三木澄子 山本まつ子・画
20	千羽づるのねがい	山下夕美子 沢井一三郎・画	45	しゃちの子たろう	香川茂 中野博之・画
21	こぶただ110ばん	宇野克彦 多田ヒロシ・画	46	はくちょうクルル	菊地慶一 井口文秀・画
22	かけすとかしの木	平井芳夫 津田櫓冬・画	47	どうぶつたちのおしゃべり	山崎陽子 ハナアク・画
23	22ひきのかにのはなし	中川正文 清水耕蔵・画	48	ローノとやしがに—どくとるマンボウのとんちばなし	北杜夫 山田哲也・画
24	ぼくのいぬくろべえ	佐藤さとる 鈴木博・画	49	おしどりものがたり	椋鳩十 かみやしん・画
25	おりょうりのもり	舟崎靖子 野田亜人・画	50	ネッシーちゃんはおともだち	たかしよいち 橋本淳子・画



小学館